

氏 名 栗 原 伸 治

学位（専攻分野） 博士(学術)

学 位 記 番 号 総研大甲第344号

学位授与の日付 平成10年9月30日

学位授与の要件 文化科学研究科 地域文化学専攻

学位規則第4条第1項該当

学 位 論 文 題 目 『建築と文化・社会との相互作用

－中国黄土高原の窖洞住居・集落を対象として－』

論 文 審 査 委 員 主 査 教 授 崎 山 理
助 教 授 塚 田 誠 之
助 教 授 小 長 谷 有 紀
教 授 周 達 生（関西学院大学）

論文内容の要旨

中国黄土高原には、“窑洞(yao-dong)”とよばれる「伝統的」な穴居が存在する。窑洞は、穴居だからこそ、地質的な特徴をもった黄土高原内では普遍的にみられるものの、黄土高原をこえては存在し得ない。これにたいし、黄土高原には、ここに対応する文化・社会、民族などの概念はなく、また建築とそれらとの対応もない。つまり、ここでは、文化・社会や民族といった先験的枠組みにとらわれることなく、固有の建築類型がもつ文化的な規範や統合力があらわれやすいと推定できる。

本論文の目的は、中国黄土高原での現地調査にもとづいて、建築を切り口にして文化・社会の動態を考察し、そのうえで建築が文化や社会にたいして与える活力を具体的によみ解いてゆくことにある。これまでの先行研究との対比からみて、建築をたんに物質文化のひとつとしてとらえるのではなく、アプリアリでない文化・社会と建築との相互作用を積極的に視野にいれつつ建築のもつ文化的統合力を追究している点が、本論文の独自性である。

6章からなる本論文の各章における論述の概要は、以下のとおりである。

第1章では、本論文の背景、目的・意義と、先行研究の検討から本論文の位置づけをあきらかにした。また、調査対象、調査、研究方法などの概要についても述べた。

第2章では、本論文の切り口となる窑洞の物的な面での特徴をあきらかにした。まず、窑洞建築のいわば通時的な位置づけと共時的な位置づけをおこなった。つぎに、窑洞建築の総合的な再分類をこころみた。そのうえで、窑洞建築および窑洞住居建築の固有性について考察した。その結果、窑洞建築の固有性として、第一に「掘る」ことによって得られた構造体としてのアーチ形状の内部空間という形状と建設方法に関連したことが、第二にそして窑洞住居建築の固有性として、物的な要素、材料、機能、平面構成において「多配列的」により「洗練」していることがあげられると指摘した。

第3章では、まず窑洞および“房屋(fang-wu)”とよばれる「近代的」な家屋の空間構成について分析したうえで、両者の住居空間にたいして現地のひとつとが潜在的な意識レベルでどのような秩序づけをおこなっているのかを、空間序列にかんする秩序の生成文法とその傾向という観点から、統計的かつ視覚的に分析した。そして、窑洞から房屋へ移り住むという近年の現象に焦点をあてれば、両者の空間構成は類似しているものの、移り住みにともなって、中庭を中心とした住居空間にたいする現地のひとつとのとらえ方が、外部的なものから内部的なものへと変化した、あるいは変化しつつあることを指摘した。また、秩序の地域的ズレ、理念と実態とのズレについても同様の方法をもちいて分析し、これら静態的秩序の動態的解釈をこころみた。そのうえで、秩序の動態的視点と展望にかんする考察もおこなった。

第4章では、第3章で得られた視点と展望をもとに、窑洞も黄土高原の「伝統」もいまなお「生きている」黄土高原北部の集落を対象とした住空間の秩序にかんする諸相の記述を、民族誌的資料にもとづいておこなった。まず、対象とした窑洞集落の集落空間を描くとともに、窑洞の住居

空間もその建設方法にしたがって記述した。つぎに、住空間でみられる基礎としての静態的秩序についてのべた。一方、動態的秩序については、それが顕在化する儀礼や年中行事を取り上げて、それぞれの場における住空間の秩序にかんする諸相の記述をおこないながら解釈していった。最後に、これまでみてきた社会秩序の隠喩でもある空間秩序の動態的解釈をこころみて、第3章での分析結果も考慮しながら、住居空間の住空間における位置づけにかんしての考察をおこなった。その結果、住居空間とは、住空間において、①基礎としての静態的秩序が存在し、同時にあるときにはそれらと一致した、またあるときにはそれらとはちがった動態的秩序もあらわれる空間分節、かつ、②中心にかんする秩序が「面」的にあらわれない空間分節、である(①∩②)と位置づけられることを指摘した。

第5章では、前の3章であきらかにしたように構成され、秩序づけられ、位置づけられる住居・建築にたいする、図像的、感覚的な住居観・建築観のそれぞれについて、前の3章と対比しつつ考察した。前半では、現地のひとびとは住居を図像としてどのようにみており、それにたいしてどのような理想をもっているかについて考察した。ここでは、第3章での分析結果をべつの角度からあらためて論証し、さらには住居空間のとらえ方にたいする居住歴の影響も指摘した。また、第4章で考察した住空間における住居空間の位置づけの今後の変化も予想した。後半では、現地のひとびとは住環境としての住居・建築にたいしてどのような感覚をもっており、現地のひとびとにとってのそれはどのような存在なのかについて考察した。そして、黄土がかれらのいう「環境」の第一の要素であることと、窯洞住居は母親像がもつ二面性のうちの一面を兼ね備えており、それが期待されていることをのべた。最後に、前の3章と本章での考察結果をもとに、図像的、感覚的な住居観・建築観の両者をあわせた黄土高原における住居観・建築観にかんして、「掘る」という行為を中心に、総合的なまとめの考察をおこなった。

第6章では、本論文の結論をのべるとともに、今後の課題と展望についてものべた。

以上のような各章での考察結果をもとに、本論文ではおもに以下の4点を指摘した。

I. 窯洞は、「掘る」ことによって得られた空間を中心に展開しており、その建設行為は、日常的におこなわれている。黄土高原には、この窯洞という建築を媒介とした社会集団や社会環境が存在している。

II. 黄土高原のひとびとにとっての「掘る」こととは、自然環境と一体化しつつもそれをその内から日常的に制御し管理しようとする内部世界をつくることで、建築するという実践の基礎としてとらえることができる。

III. 身体行為としての「掘る」ことが、ほかとは差異化のできる固有の「知識」を生産し、それらは窯洞に住まうことをとおして再生産される。

IV. 窯洞こそが黄土高原の地域文化を規定しており、窯洞に住まうことをとおして、その地域文化とそれを身につけた成員をもつ社会集団からなる地域社会を再生産している。

すなわち、窯洞という建築と黄土高原という地域文化・社会は、両者の相互作用のなかで、「掘る」ことを基礎に、黄土高原の窯洞に住まうことをとおして、継承され、維持されてきたことを

あきらかにした。同時に、文化的・社会的概念としての窯洞という建築が、そこに住まうアブリオリでない集団を、政治的イデオロギーとは無関係に、「民族」とはちがった次元でひそかに規定し、秩序づけてきたことも指摘した。そのうえで敷衍的に、建築と文化・社会との相互作用のなかで、建築に住まうことをとおして規定され、生産あるいは再生産されてゆく文化・社会の存在について、つまりきわめて積極的な文化的・社会的概念としての建築がもつ力について指摘した。

論文の審査結果の要旨

本論文は、中国黄土高原において「窖洞」とよばれる伝統的な穴居を対象とした数年間にわたる現地調査の成果に基づき、建築を切り口にして文化・社会の動態を考察し、建築のもつ文化的統合力を一貫した分析と論理によって追究した力作である。とくにその方法論において、物質文化的研究に留まらず、住空間の分節を視覚的にとらえ、さらに人びとの意識における空間分節まで踏み込んで明らかにしようとした点が高く評価できる。

従来、人類学における建築に関する研究は象徴論的分析にかたむいており、住居をミクロコスモスにたとえる観点は動態的な側面への理解と方法論を欠いていたといえる。本論文は、正確な図面の描出や統計的分析など建築学的分析を生かしながら、窖洞を窖洞たらしめている最も本質的な要素として「掘る」という行為に着目し、この実践によって規定される社会集団や社会環境が存在すること、この行為によって自然環境を日常的に制御し、管理しようとする内部世界が形作られること、この行為によって固有の知識が再生産されること、などが明らかにされる。

結論として、黄土高原において窖洞こそが地域文化を規定し、また地域社会を再生産する枠組みになっていることを明示することによって、建築のもつ文化的・社会的意義を強調することに成功している。

第1章では、先行研究を整理したうえで、建築と文化・社会との相互作用を明らかにしようとする本論文の意図が示される。

第2章では、窖洞建築の物的側面である「掘る」ことによって得られた構造体としてのアーチ形状の内部空間という形状と建築方法であることが示されるとともにその固有性として物的要素や平面構成において多配列的で洗練された建築であるという点が人びとの視点（認識）に基づいて明らかにされる。

第3章では、窖洞から近代的な家屋「房屋」への移り住みが生じている現象を両者の住居空間に対する人びとの潜在的な意識レベルでの秩序づけの変化という動態的視点から考察している。そして窖洞から房屋への移り住みによって、中庭を中心とした住居空間に対し、方位に関する秩序の優位から入口に関する秩序の優位への変化が見られることを指摘した。

第4章は、窖洞をめぐるさまざまな儀礼や年中行事が記述され、本論文の主たる部分を構成する。建設儀礼すなわち窖洞が建設される過程や年中行事すなわち建設後の住まわれる過程が分析される。例えば、血縁や地縁を越えたあらゆる年齢層の人びとが建設に参加することにより建築をめぐる知識が継承され、また結婚式や葬式の式次第に応じた席順によって分節化された空間の秩序とその知識が維持されるというように、「掘る」ことの文化的統合力と「住まう」ことの文化的統合力が明らかにされる。

第5章では、メンタル・マップの手法を用いることにより、人びとの描く図像から住居観・建築観が分析される。そして黄土が「環境」の第一の要素であること、さらに第3章の、窖洞と黄土高原の地域文化・社会との相互作用が「掘る」という行為を中心に継承され、維持されていることが補足される。

最後の第6章では、建築に住まうことによって成立する文化という枠組みが述べられ、

今後の展望にも言及し、まとめとする。

論述方法は明快であり、添付されている豊富な図面も論旨を十分に補っている。ただし、アナロジーとして援用される言語学の術語が未消化の場合があること、バイナリーな分析概念に頼りすぎること、また年中行事の記述において住空間の秩序との関わりについていくつかの行事に限定してしまっているのが民族誌として十分でないといった問題点もあるが、これらは論旨全体を損なうものではない。

本論文は、建築学と民族学を包含しながら住居空間の秩序に関する動態的解釈を通じ、建築が文化・社会に与える力の解明をめざした独創的な研究として高く評価することができる。

以上のことから、本論文は学位を授与するに値するものと認定する。